

北條民雄「いのちの初夜」のモノローグ

—よみがえる「ハンセン病文学」の真実—

田中 寛 (大東文化大学名誉教授)

Monologue of Tamio Hojō
 "Inochi no Shoya (First Night of Life)":
 The Truth of the Evival of "Leprosy Literature"

Hiroshi TANAKA

一・新緑の武蔵野を歩く

新緑の武蔵野は空気が澄んでいた。JR武蔵野線の新秋津駅から徒歩で二十数分先にある国立ハンセン病資料館を目ざした。もう一つのルートは西武線清瀬駅からのバス便があるのだが、天気も良く歩いてみることにした。途中、病院関連の施設が多く目に留まった。緑が豊かで空気も清らかな清瀬市の周辺には、戦前から結核患者専門の療養所が集中して建てられ、日本における結核治療の歴史を今日に残している。歩を進めながら、自分がかもし癒患者だったとして、これから療養所に向かう心境を想像しようとしていた。あの「いのちの初夜」の主人公、尾田高雄が見廻したように、首を吊れそうな枝はいくらでもあった。初めて訪れる資料館に、期待と不安が入りまじっていた。そこで何を見てどう受け止めるのか、多くの逡巡があったが、歩むにつれて少しずつ浄化されていく気がした。

思い起こせば、三十代の後半、私もまたこの東村山市にある結核病院を訪ねたのだった。ある日突然高熱と激しい咳に襲われ、診察の結果、早期に治療を受けるようにと専門の病院を紹介されたのである。日本語授業のクラスに台湾から来た女子留学生がいていつも咳をしていた。父を胸の病で早くに亡くした私は、他人より咳には敏感だったが、仕事上やむを得なかった。いつしか感染したようだった。幸い、私は入院する

こともなく数回通院しただけで回復したが、その病弱な留学生はやがて学業を断念して帰国した。以来胸の病気には気をつけるようになった。そんな三十数年前のことも思い起こしながら歩いていると、木漏れ日の彼方に建物の全容が見えてきた。隣りに国立感染症研究所、ハンセン病研究センター、薬剤耐性研究センターがあり、実に広大な敷地である。

五月、青葉の燃えるような季節。同じ月の一日に北條民雄、本名七條晃司は全生病院、現在の資料館に隣接する国立療養所多摩全生園に入院した。入院前に友人と日光華厳の滝に自殺に行くも友人は決行したが、彼は未遂で終わっている。「いのちの初夜」では江ノ島での自殺未遂が描かれている。その前に七條家から除籍の手続きがなされ、大きな衝撃を受けていた。小説「いのちの初夜」では一人で訪れた設定になっているが、一人ではあまりに不安が大きすぎたのか、実際は上京した父親に付き添われての入院であった。

思えば文学との出遭いとは不思議なものである。偶然が必然のようにも思える。出遭うべくして出遭う奇蹟。そこにはいつも精神が枯渇していた季節があった。私をはじめ北條民雄「いのちの初夜」に出遭ったのは大学生になって間もない頃であった。学藝書林から出された全集全16巻『現代文学の発見』のうちの第七巻『存在の探求（上）』（一九六七）に収められていた。私が購入したのは第三刷（一九六八）である。解説は詩人の高良留美子であった。この「存在」はいうまでもなく「人間の存在」である。人間とはいかなる存在なのか。同書には、新しい文学の発見が凝縮されていたが、北條民雄の作品は作品の衝撃的なタイトルと共に、その後も長く私の胸の中に生き続けることになった。

ちなみに『存在の探求（上）』には、ほぼ時系列的に次の作品（*は評論エッセイ）が収められている。いずれの作品も人間の（存在）の本質（不信）を徹底して凝視した作品であることは疑いをいれない。

梶井基次郎「桜の木の下には」、「闇の絵巻」／北條民雄「いのちの初夜」／中島敦「悟浄出世」、「悟浄歎異」／稲垣足穂「彌勒」／椎名麟三「深夜の酒宴」／埴谷雄高「死霊」／武田泰淳「ひかりごけ」／椎名麟三「スタヴローギンの現代性」*／埴谷雄高「存在と非存在ののっぺらぼう」*、「夢について」*／武田泰淳「滅亡について」*

北條民雄と並び称される天才夭逝作家中島敦（1909-1941）の作品と隣り合っているのも興味深い。「現代文学の発見」は一九六〇年代から七〇年代に青春を送った世代には、おそらく最もよく、かつ真摯に読まれた全集ではないだろうか。私もこの全集で椎名麟三、武田泰淳、埴谷雄高といった戦後文学の作家達と遭遇したはずである。全集はその後、改版されたが、今、店頭にもなく、図書館に所蔵されていても、読者も極端に少なくなつたのではないだろうか。

私には青春期から成人に至る過程で、なぜか死に至る抑えがたい衝動のようなものがあつた。自殺願望というのではない。思春期から私は忘れゆく生命への鎮魂歌のようなものを好んで読んで読んだ記憶がある。それは戦没学生の手記『きけわだつみの声』（一九六五）であり、林尹夫『わ

がいのち月明に燃ゆ』(二九六七)といった特攻隊員の手記であったりした。昭和三十年代から四十年代にかけて、まるで高度経済成長を続ける日本に抗するように、すぐれた戦争文学が矢継ぎ早に発表されたことも長い影を落としていた。生きている自分にどのような意味があるのか、悩み、迷い多き青春期には珍しくない邂逅だったのかもしれない。北條民雄という作家との出遭いもその延伸にあったように思う。

二・少年時代の回想から

私事になるが、私は熊本県熊本市黒髪町(旧町名)の出身である。なぜ、わざわざかつての本籍地のことを言い出したかといえば、自宅の近くに、日常とは隔絶した施設があったからである。すでにそこは老人ホーム(当時は養老院と称した)になっていたが、前身は癩病患者を収容する病院だったと聞いて、近くを通る時は息を止めるようにして歩いていたいことを思い出す。母親からかつてイギリスから二人の女性宣教師、ハンナ・リデル(1858-1932)、エダ・ハンナ・ライト(1870-1950)が癩病救済にやっつけてきたことも聞かされた。まずリデルが、その死後、ライトが赴任したことに感銘を覚えたかどうか。まだ、幼い私はただ二人の名前だけを記憶にとどめたにすぎなかったと思う。

熊本市内、国道37号線を西に進むと立田山入口の案内が見える。熊本大学の敷地を左に見やりながら走ると坂道に差し掛かる。さらに直進すれば立田山麓に行き当たり、熊本藩主細川家の菩提寺泰勝寺、自然公園がひろがる。手前に紅葉山という小さな山があった。左手の坂をのぼり詰めると小峰墓地があり、日清・日露・日中戦争の戦没者を慰霊する忠霊塔があり、何本もの矢に突き刺された男性の裸像のレリーフがあり、右手に進めば昔は癩病院があった、という地理的な環境が、少年に言い知れぬ暗い想念を植えつけなければならなかった。そこには七歳まで過ごしたけれども、どこかに当時の記憶は生き続けていたことは間違いない。また、母親からは戦争末期に次々と若い学生が特攻隊員となって鹿児島の前線基地鹿屋や知覧に出撃していった時のことを繰り返し語り聞かせてくれたことも鮮烈な記憶である。

私は二〇〇四年に一年間、英語学研究者でも英文学研究者でもなく、一介の在外研究者として英国をどうしても選ばねばならなかったのは、ロンドンに留学した夏目漱石がかつての旧制第五高等学校(現熊本大学)で英文学を講じていたことも影響していたのだが、潜在意識的にあのリデル、ライトの記憶が誘ったのかもしれない。ライトはその後、戦時色が強まるにつれスパイ容疑をかけられ、官憲からの見張りを受けることになり、さらに一九四一年には療養所から入所者を強制隔離してついに回春病院は閉鎖されるにいたる。その時の悲しみをライトは手足をもぎ取られるようであった、と回想している。

時は流れ、二〇〇六年八月に私は数十年ぶりに校務で故郷熊本を訪れる機会があった。だが、職務の都合もあり時間が押していて、リデル・ライト記念館を訪れることはなかった。今回、ハンセン病資料館を訪れたことで、熊本菊池恵楓園療養所、また熊本市内本妙寺から当時の熊本回春病院が多くの癩患者を受け入れたことなど、詳しい経緯を知ることができた。

この資料館は一九九三年六月に「高松宮記念ハンセン資料館」としてオープンしたが、二〇〇五年九月にリニューアル後、現在の「国立ハンセン病資料館」として再開館した。なぜ今まで訪れなかったのだろうか。ある種の自責の念にも似た感慨を抑えながら歩を進めた。

入館前に目を引いたのは、資料館の入口の右に置かれた親子像である。「母娘遍路像」と名づけられている。札所から札所への旅。それは松本清張の名作『砂の器』にも登場する場面でもあった。「南無大師遍照金剛」を唱えつつ、四国遍路によって人間性の回復を求め続けた人たちがどれほどいたのだろうか。「安んじて親族と暮らせるその日まで 隔てなく命輝くその日まで 母娘遍路の旅は果てない」と刻まれた銘板も印象的だった。

野の花を 摘みて子遍路 おくれけり (宗子)

一階の受付で女性係員の案内で来訪者アンケートを記入し終わると、ロビーには先ごろ(二〇二三年四月九日)亡くなられた成田稔名誉館長の遺影があった。そして壁面のボードには、ここ数年のハンセン病関連の新聞記事が掲げられていた。私はその一つ一つの出所をメモした。気持ちを鎮めるようにして大きく息を吸い、二階の展示場に足を運んだ。

二階には、右手に図書室があり、その隣に特別展示、常設展示がおこなわれていた。室内は写真撮影が禁止されているため、所要所要を書き留めていく。まず、常設展示場から見っていくことにする。受付時にいただいたパンフレットは資料館の歩み、設立の趣旨、展示内容などが簡潔に紹介されている。現在も国立のハンセン病療養所は全国で十三カ所、私立が一カ所ある。熊本には菊池恵楓園があり、今も百数十名の収容者が暮らしているという。高齢化や後遺症害、根強く残る差別意識などによって、社会復帰にはまだ多くの課題が残されているという。こうした諸問題は私の経験に照らししても、決して学校の授業では教わらなかったし、教師も固く口をつぐんでいたように思う。

平日ということもあり、入館者はそれほど多くなかった。館内の展示をパンフレットに沿って記しておく。

展示室1 「歴史展示」：古代から近世まで、患者収容の始まり (1870-1920)・隔離の強化 (1920-1945)・化学療法と患者運動 (1945-1996)・らい予防法廃止と国家賠償請求訴訟 (1996-)

展示室2 「癩療養所」：癩者の実際の暮らしを再現している。患者作業、職員による懲戒検束、断種と墮胎という過酷な現実。人権侵害の真相が展示されている。

展示室3 「生き抜いた証」：回復者への困難な道、生き抜くための苛酷な状況が展示されている。人権回復のための長い闘いの実相が明らかにされている。

証言コーナー：園内や海外のハンセン病回復者や関係者の証言映像を視聴することが出来る。

このほか、映像ホールで講演記録などを視聴することができる。

人間は病から逃れられない。かつて業病と言われ、前世の悪業の報い、天罰とされた難病。とくにのちにノルウエーの細菌学者G・H・Å・ハンセンによって命名されるまで、この難病はらい病、天刑病と言われた。仏教もイスラム教もそうした教えが信じられたが、キリスト教によってのみ「清められるべき病」と称された^①。

イエス山を下り給いしとき、大いなる群衆、これに従う。視よ、ひとりの癩病者、みもとに來り拝していう。「主よ、御心なれば、我を潔くなし給うを得ん」。イエス手を伸べ彼につけて「我が意なり、潔くなれ」と言い給えば、癩病ただちに潔まれり。

ひとたび罹患すれば、本人の隔離のほか、家族身内までいわれなき差別、蔑みをうけ、人間性の回復までには議員立法として制定された「ハンセン病補償法」(二〇〇一)、「ハンセン病問題基本法」(二〇〇九)の施行などをめぐって、多大の時間を要したことが展示室に刻まれている。展示で特に目を引いたのは、十数名にのぼる、ハンセン病の治療、啓蒙普及に尽力した内外の方々の献身的な努力である。敬虔なクリスチャンがいた。高僧がいた。その多くの人たちとも初めての出遭いであった。澄んだ人道的なまなざしが私の目を射続けた。多くの写真や映像のひとつひとつが胸をうつ。鉛筆を手に紐で括り付け、ひたすら原稿用紙に、ノートに向かう。スプーンで碁石をすくっては囲碁にいそむ。こうした姿に胸を衝かれる。人はどんな境遇にあっても、創作し、他者と交わり、自分という存在をその日常の中に感受せずにはいられない。

企画展示室では「ハンセン病文学の新生面 「いのちの芽」の詩人たち」の紹介である。今回の訪問は、この新聞記事の紹介がきっかけであった^②。また、詩集『いのちの芽』が無料配布されるとあって、ぜひとも入手して読んでみたいと思ったのである。

三．北條民雄「いのちの初夜」再読

ハンセン病文学といえば北條民雄がまず思い浮かぶが、この作家はただそれだけの意味にとどまらない、文学の本質、光彩をいまなお鮮烈に放っている。北條民雄(一九一四―一九三七)は陸軍経理部の父の赴任地だった京城(現ソウル)で生まれ、徳島県阿南市で育った。高等小学校を卒業後、一四歳で上京、法政中学夜間部に学ぶ。一八歳でハンセン病の診断を受け、一九歳で東京府北多摩郡の全生病院で療養生活に入る。入院中の二十歳、小説「間木老人」を川端康成に送り、高い評価と激励を受け、『文學界』に掲載される。二二歳「いのちの初夜」が「文學界賞」を受賞、芥川賞の候補になる。二三歳、結核を患い死去。日中戦争が勃発した年であった。

以下、北條民雄の作品がどのように世に出たかを、各種作品集、選集により瞥見する。

昭和十一年一月に『いのちの初夜』が創元社より出版された。収録作品は、「いのちの初夜」「間木老人」「癩院受胎」「癩家族」「猫料理」「眼帯記」「癩院記録」「続癩院記録」の八篇で、「跋」は川端康成が書いた。

だが、反響はどうであったか。時代は暗黒の戦争の時代に向かっていた。純粹な国民統合と挙国一致をかかげる政府、軍部にとって、(規格外)の国民、生命を保護する余力はもはやなかったと思われる。川端はそのささやかな抵抗の証のように北條民雄の存在を擁護したのである。

そして戦後、民主主義の移植とともに、ようやく人権についての国民的認識が芽生えてくる。それでも戦後の経済復興と高度成長が最優先された時代であって、再び光が当てられるまでには幾多の紆余曲折があった。以下、著作集を瞥見する。

北條民雄の著作については北條のデビュー当時から支援のあった東京創元社から『定本北條民雄全集(上下)』(一九八〇、のちに創元ライブラリー文庫、上下巻一九九六)が彼のほぼすべての著作を網羅している。川端康成、川端香男里の編集になる。

一方、文庫では『北條民雄集』(岩波文庫 二〇二二)が一番新しいが、小説、童話、随筆、日記、書簡から代表作を精選しているため全体を知るにはやや物足りなさが残る。構成は次のようになっている。

小説四篇…いのちの初夜、問木老人、吹雪の産声、望郷歌／童話二篇…かわいいボール、すみれ／随筆八篇…発病、発病した頃、眼帯記、書けない原稿、独語——癩文学ということ、柘の垣のうちから、井の中の正月の感想、断想／日記(抄)四篇…一九三四年、一九三五年、一九三六年、一九三七年／書簡(抄)…川端康成への書簡八点／臨終記(東條耿一)／注解および解説(田中裕)、略年譜

次に『北條民雄小説随筆書簡集』(講談社文芸文庫 二〇一五)は小説、掌編・童話、随筆、書簡がほぼ網羅されており、解説(若松英輔)、詳細年譜(計盛達也)がある。紹介文には「…二三歳で夭逝するまで、創作期間はわずか数年。病の進行と死に直面する極限状況の中、生の根源を小説に刻みつけた作品群は、文学史に比類ない鮮烈で壮絶な頂を成している。北條のすべての小説(完成作品)を中心に、川端康成や中村光夫と交わした数多くの書簡、一部の未完小説と随筆を収録。孤高の天才作家の、魂の軌跡を辿る」とあるように、最も充実した文庫本である。同書では「癩院記録」、「続癩院記録」、「猫料理」、「眼帯記」を小説ではなく、随筆類に分類しているが、この境界を見定めることは難しい。小説執筆の根底には、たえず日常の観察が前提となっているからである。同書によって北條民雄という作家のほぼ全貌を知ることができるだろう。編集の趣旨もおそらく後世へのそうした願いを込めてのことであつたと思われる。収録作品は次の通りである。

小説9篇…いのちの初夜、問木老人、癩院受胎、吹雪の産声、癩家族、望郷歌、道化芝居、青春の天刑病者達、癩を病む青年達
 掌編・童話6篇…童貞記、白痴、戯画、月日、可愛いボール、すみれ
 随筆8篇…癩院記録、続癩院記録、発病、発病した頃、猫料理、眼帯記、柘の垣のうちから、烙印をおされて
 書簡…川端康成、中村光夫、五十嵐正、東條耿一、光岡良二、森信子、小林茂

川端康成との往復書簡は九十通を占めている。その一方で、残念なことに岩波文庫に収録されていた随筆「書けない原稿」、「独語——癡文学」ということ、「井の中の正月の感想」は収められていない。また、日記も収録されていない。

角川文庫『いのちの初夜』は二〇二〇年に改版が出され、短篇八篇、「いのちの初夜」、「眼帯記」、「癡院受胎」、「癡院記録」、「続癡院記録」、「癡家族」、「望郷歌」、「吹雪の産声」が収められている。「あとがき」は川端康成、「北條民雄の人と生活」(光岡良二)をふくめ、解説は高山文彦が新たに加わった。年譜も収録。初版は一九五五年に出されたが、二〇二〇年に待望の改版初版発行となった。帯には「コロナ禍に必ず読んでほしい本!」とある。このほか新潮文庫『北條民雄集 中村光夫編』(一九五二)があるが、現在では入手が困難である。「いのちの初夜」(間木老人)「癡家族」「望郷歌」の短篇のほか、随筆「猫料理」「眼帯記」、感想として「一九三六年回顧」「年頭雑感」「頃日雑記」、日記、書簡、年譜を抄録。解説は中村光夫が書いている。一九六六年まで十一刷が出された。このほか、青空文庫(一九五五)、さらに電子書籍では「外に出た友」、「キリスト者の告白」、「孤独のことなど」、「頃日」「続重病室日誌」「青春の天刑病者達」「一九三六年回顧」なども読むことが出来るが、文庫本には収録されておらず、全貌を知るには定本全集を参照することになる。なお、近年になって『北條民雄集』(青猫出版、Kindle版、二〇一六)には、全30作品が収められている。

多くの薄命作家のなかで、夭逝した北條こそ孤高の天才作家の名にふさわしい。北條民雄の年譜については、以上述べた通りだが、彼が川端康成に宛てた書簡には略歴を記した箇所があり、自筆ではこれが唯一のものである。以下に転写する。最後に「北條民雄」と記されている。

大正三年九月徳島に生る。昭和四年上京種々の職業を転々、その間二、三の学校に学びしも学歴と称すに足らず。昭和七年結婚せしも、翌年癩の発病により破婚。昭和九年五月全生病院に入院。川端康成先生に師事して現在に及ぶ。小説「いのちの初夜」(ママ) 東京市外東村山全生病院。

そこは療養所でもなく診療所でもなく、完全に社会から隔絶された収容所であった。罪もないのに、業病、天刑病と蔑まれ、奈落の底に突き落とされた。入所初日、夜を迎えて眠れない夜が続く。目を覆いたくなる奇怪に崩れた患者たちを主人公尾田はぼう然と眺め、あらためて覚悟を迫られる。ここから透徹した観察に基づき、究極ともいえる言語表現が誕生する。

「いのちの初夜」から鮮烈な生の描写を数か所ひく。

「俺は、何処へ、行きたいんだ。」

ただ、漠然とした焦燥に心が煎るるばかりであった。——行場がない何処へも行場がない。曠野に迷った旅人のように、孤独と不安が犇々と全身をつつんで来た。熱いものの塊がこみ上げて来て、ひくひくと胸が嗚咽し出したが、不思議に一滴の涙も出ないのだった。

入所してはみたものの、尾田はとてもここでは生きていけないと悟ったのか、一人園内から外へ出て自殺を試みるも、葛藤と逡巡のなかでなかなか実行できない。おまけに寄宿をとにもする、佐柄木に一部始終を目撃されてしまう。自己嫌悪に苛まれるように眩くほかなかった。そして次の夜、ベッドに横たわる患者たちの化け物のような姿を見て、ますます生きる希望を無くすのだが、佐柄木は黙々と、まるで悟りきったかのように彼らの身辺の世話をしている。そして、尾田に語りかけるのだった。

「ね、尾田さん、新しい出発をしましょう。それには、先ず癪になりきる必要だと思います。」

と言うのであった。便所へ連れて行ってやったことなど、もうすっかり忘れているらしく、それが強く尾田の心を打った。佐柄木の心には癪も病院もないのであろう。この崩れかかった男の内部は、我々と全然異なった組織で出来上がっているのであらうか。尾田には少しづつ佐柄木の姿が大きく見え始めるのだった。

「死にきれない、という事実の前に、僕もだんだん屈服して行きそうです。」

と尾田が言うと、

「そうですよ。」

と佐柄木は尾田の顔を注意深く眺め、

「でもあなたは、まだ癪に屈服してられないでしょう。まだ大変お軽いのですし、実際に言って、癪に屈服するのは容易じゃありませんからねえ。けれど一度は屈服して、しっかりと癪者の眼を持たねばならないと思います。そうでなかったら、新しい勝負は始まりませんからね。」

「真剣勝負ですね。」

「そうですとも、果合いのようなものですよ。」

絶望の底に突き落とされた尾田は、佐柄木という文学を志す青年に心をひらかされる。「癪に屈服する」。そこからしか新しい世界は生まれない。佐柄木が自らに言い聞かせるかのように語る次の場面ほど胸を打つものはない。

「尾田さん、あなたは、あの人達を人間だと思えますか。」

佐柄木は静かに、だがひどく重大なものを含めた声で言った。尾田は佐柄木の意が解しかねて、黙って考えた。

「ね尾田さん。あの人達は、もう人間じゃあないんですよ。」

尾田はますます佐柄木の心が解らず彼の貌を眺めると、

「人間じゃありません。尾田さん、決して人間じゃありません。」

佐柄木の思想の中核に近づいたためか、幾分の興奮すらも浮べて言うのだった。

佐伯は「人間ではない」という事実を何度も繰り返す。繰り返しながら思想の中核に近づいていくのである。癡者の世界に成り切ることへの宣言であるかのように。佐柄木は新生、北條の分身でもあった。佐柄木は続けて言う。

「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです。僕の言うこと、解ってくれますか、尾田さん。あの人達の「人間」はもう死んで亡びてしまっただけです。ただ、生命だけが、びくびくと生きているのです。なんとこの根強さでしょう。誰でも癡になつた刹那に、その人の人間は亡びるのです。死ぬのです。社会的人間として亡びるだけではありません。そんな浅はかな亡び方では決してないのです。廃兵ではなく、廃人なんです。けれど、尾田さん、僕等は不死鳥です。新しい思想、新しい眼を持つ時、前々癡者の生活を獲得する時、再び人間として生き復るのです。復活、そう復活です。びくびくと生きている生命が肉体を獲得するのです。新しい人間生活はそれから始まるのです。尾田さん、あなたは今死んでいるのです。死んでいきますとも、あなたは人間じゃあないんです。あなたの苦悩や絶望、それが何処から来るか、考えてみて下さい。一たび死んだ過去の人間を捜し求めているからではないでしょうか。」

ここにも日本語によつてしかなしえない言語表現の精確さが随所にみられる。多くの反復、たたみかけるような告発。「死んでいきますとも、あなたは人間じゃあないんです」と言い切つてから、最後に再生への出発を祈願する。

ここで「生き返る」ではなくあえて「生き復る」と書いていることに注目しなければならぬ。「復活」である。廃人にはなつたが、不死鳥として生きる。「びくびくと」生きている生命そのものである、と。この「びくびくと」という表現がすべてを物語っている。

作品の終わりにかけて、夜明け前のしらじらとした園内を尾田と佐柄木は歩きます。光に向かつて大地を一步一步踏みしめていく。作品の、感動的なフィナーレの場面である。

「苦悩、それは死ぬまでつきまとつて来るでしょう。でも誰かが言ったではありませんか、苦しむためには才能が要るって。苦しみ得ないものもあるのです。」

(中略)

佐柄木の世界へ到達し得るかどうか、尾田はまだ不安が色濃く残っていたが、やはり生きてみることにだ、と強く思いながら、光りの縮目を眺め続けた。

この場面を私は苦境に立たされるたびに、幾度思い起こしたことだろう。「光り」に向かつて歩きたず時、闇は後方に押しやられる。「苦しむためには才能が要る」。それはただ「苦しむ」ことではなく、新しい生を求めするための、産みの苦しみである。確かにそう信じるとき、才能もそうだが、努力、意志が必要なことは言うまでもない。「苦しみ得ないもの」とは苦しむための対象でもあり、苦しむ主体でもある。救済の文学は、究極の世界からしか生まれない。

四、北條民雄が生きた時代

上掲『存在の探求（上）』の解説者、高良留美子は「いのちの初夜」の作品背景を次のように述べているが、文学状況を理解するには社会、時代状況を正確に把握しなければならないことの手本のように思える一文である。

一九二〇年代の後半から三十年代（昭和初年から十年代）にかけての日本は、一九二七年（昭和二年）の金融恐慌、一九三一年（昭和六年）の満洲事変、一九三六年（昭和十一年）の二・二六事件、一九三七年（昭和十二年）の日華事変というように、日本資本主義の矛盾が激化すると同時に、日本の政治がその矛盾を外にむけて次第に侵略的軍国主義的色彩をつよめていった時代である。北條民雄の描いた癩者の顔とは、足の下に龐大な貧困と荒廃を生みだしながら侵略戦争につっこんでいった日本の近代社会そのものの顔であり、かれはそれを映す鏡をつくったのではないだろうか。

そして、北條民雄がわずか二三歳で夭逝したのが日中戦争が勃発してまもなくであったことも、私には非常に象徴的なことのように思われるのである。欧米に肩を並べ富国強兵、近代化に邁進するためには「優性保護」を旨とし、一切の無駄や非効率を排除した。その結果、差別や弱者への排斥は敷衍されていく。療養所内のさまざま矛盾は日本社会の矛盾そのものの、凝縮した世界であった。尾田の見た奇怪な面貌、いつ自分もそうなるか分からない分身のようでもあった。突如「にゅっと」現れた「貌」、それは迫りくる暗黒日本の〈貌〉でもあったにちがいない。衝撃のモノローグの世界である。

とたんに風呂場の入り口の硝子戸があくと、腐った梨のような貌がにゅっと出て来た。尾田はあつと小さく叫んで一歩後ずさり、顔からさっと血の引くのを覚えた。奇怪な貌だった。泥のように色艶が全くなく、ちよつとつつけば膿汁が飛び出すかと思われるほどぶくぶくと膨らんで、その上に眉毛が一本も生えていないため怪しくも間の抜けたのつぺら棒であった。駆け出したためか興奮した息をふうふう吐きながら、黄色く爛れた眼でじろじろと尾田を見るのであった。尾田はますます眉を窄めたが、初めてまざまざと見る同病者だったので、恐

る恐るではあるが、好奇心を動かさながら幾度も横目で眺めた。

普通一般の「顔」ではなく「貌」と表記したところに、顔だけでなくそこに集約された存在が浮き立っている。「怪しくも間の抜けたのっぺら棒」は癩者に共通する面貌であった。それは時代の鏡像のようでもあった。

どす黒く腐敗した瓜に鬘を被せるとこんな首になろうか、顎にも眉にも毛らしいものは見当たらないのに、頭髮だけは黒々と厚味もつたのが、毎日油をつけるのか、櫛目も正しく左右に分けられていた。顔面と余り不調和なので、これはひよっとすると狂人かも知れぬと、尾田が不気味なものを覚えつつ注意していると、……

やがて尾田は日常的な光景の中に、ある静かな畏敬的な瞬間を体感するようになる。徐々に同化されていくような時間、世界のなかにいた。

二列の寝台には見るに堪えない重症患者が、文字通り氣息奄々と眠っていた。誰も彼も大きく口を開いて眠っているのは、鼻を冒されて呼吸が困難なためであろう。尾田は心中に寒気を覚えながら、それでもここへ来て初めて彼らの姿を静かに眺めることが出来た。赤黒くなった坊主頭が弱い電光に鈍く光っていると、次にはてっぺんに大きな絆創膏を貼りつけているのだった。絆創膏の下には大きな穴でもあいているのだろうか。そんな頭がずらりと並んでいる恰好は奇妙に滑稽な物凄さだった。(傍点、ママ)

一方、そうした重症患者のなかにあつて、佐柄木の平然としたふるまいは一種、傲然としたものに感じられた。おそらくは観念し、悟りきつた心境である。

崩れかかった重病者の股間に首を突込んで絆創膏を貼っているような時でも、決して厭な貌を見せない彼は、嫌な貌になるのを忘れていくらしいのであつた。初めて見る尾田の眼に異常な姿として映つても、佐柄木にとっては、恐らくは日常時の小さな波の上下であろう。

……

この凝視の時間は尾田にモノログからダイアログに転移する「変革」をもたらず瞬間であつた。やがて、佐柄木は文学を志して小説を書いていることを尾田に告白するのだが、尾田には佐柄木の日常に生きることに、そして現実を凝視することの意味を悟るのである。

五、北條民雄の文学、ふたたび

作品は文豪川端の後援もあり、やや神格化されたきらいもないわけではない。全体が独白、モノローグの世界である。そして、そのなかに対話、ダイアログの世界が一条の光明のように湧き立つ。そして、北條民雄と言えば「いのちの初夜」というようにやや評価が固定化された印象も否めないが、差別、隔離、障害者の表象、言語表現の可能性などとともに、他の作品群と重曹的、総合的に評価されなければならない。

意外に思うことでもあるのだが、青春期でもなくずいぶん時を経て北條民雄と出遭ったという人達も少なくない。無論、文学との出遭いはさまたまであり、その時々感慨もまた不可避でもあるのだが、かくいう私も『存在の探求(上)』を手にしなければ、いつであったか分からない。しかし、若くして出遭った人たちにもさまざま受け止め方もあつたはずで、私にとっては自身の、特別な感慨であつたというほかはない。

北條民雄論についてはこれまで多く論じられてきた。まとまった書籍では光岡良二『いのちの火影』(新潮社1981)、のちに「北條民雄——いのちの火影」(沖積舎1982)が最初であろうか。その後、ノンフィクション作家高山文彦『火花 北條民雄の生涯』(飛鳥新社1986)、のちに文庫『火花 北條民雄の生涯』(角川文庫2003)がある。第31回「大宅壮一ノンフィクション賞」、第22回「講談社ノンフィクション賞」受賞作品である。「北條」ではなく、「北条」と表記しているが、その背景については書かれていない。以下に、目次のみを記す。

はじめに／序章 ある回想／第一章 まぼろしの故郷／第二章 破婚／第三章 全生病院／第四章 わが師 川端康成／第五章 作家誕生／第六章 生きいきそぐ青春／第七章 いのちの初夜／第八章 放浪と死／第九章 転生の秋／第十章 遥かなる帰郷／第十一章 二十二歳で死す／終章 ふたたびの回想／あとがき

巻末には主要参考文献、関連略年譜、人名索引がある。多くのノンフィクションを手掛けてきた著者にとって、畢生の大作と言えるだろう。のちに再版された角川文庫の解説は人間の生命を告発し続ける柳田邦男氏が書いている。また、二〇二二年にはノンフィクションシリーズ人間9として七つ森書館から復刊されている。時代を経て、ようやく発症から治療の壮絶な世界、そして人間性の回復へと向かう「いのちの流れ」が明らかにされたといえる。同時に、生きることの意味が所要所に込められていることを再確認する。

このほか、清原工『吹雪と細雨 北條民雄・いのちの旅』(皓星社2002、新版2021)がある。著者は長くボランティア活動に携わり、他者と向かい合い、そこに共生共存する意味を希求し続けてきた。北條との出遭いは必然的なものでもあつた。時代の華やかさの背後にはさまざまな差別、そして絶望、徒勞がある。ともすれば私たちは繁栄のみの姿で時代を裁断し、時代に表面化し得ない世界が大部分なのを知ろうとしない。廃墟は常に繁栄の背後に存在していることを考えさせられる。新版には北條民雄生誕一〇〇年にして初めて公開された事実も収録された。著者の祖父の隣家に七條家があつたという偶然は、著者に必然的な出遭いをもたらした。高山の北條論とはまた違った角度からの省察である。同じよう

に目次のみ掲げる。

I 塩田平／II 土地に刻まれしもの／III 吹雪と細雨／IV 『山櫻』／V 花瓶の花／VI 全生村へ／VII 傾城阿波鳴門／VIII 白き海光／IX 粗い壁／X 問われるままに／XI 旅の終わりに―富士霊園文学者之墓／主な参考文献

「いのち」と「初夜」。この壮絶な命名は川端康成の勧めによるものだが、原題は「二週間」、後に「最初の一夜」であった。入院一週間の衝撃の体験をもとにしたものだ。「生命」でも「命」でもなく、「いのち」こそは永遠不滅の象徴である。川端は敗戦後二年目に戦死した特攻隊員と生き残った者たちの戦後を「生命の樹」に書き綴ったことも魂のリレーである。

世の中には周知のとおり、古今東西、多くの文学論があり、また文学者（研究者、創作者、翻訳者）は、日々身を削るように文学の本質、意義をもとめて四つに組み合っている。救済とは何か。書くこととは何か――。文学論は生きるための序説であり、試論であり、永久に定位する定説ではない。それだけに、文学に向かう情念は絶えることがない。

より突っ込んだ最近の研究として恐らくは筆頭に挙げられるのが、荒井裕樹『隔離と文学――ハンセン病療養所の自己表現史』（書肆アルス、2022）であろう。博士論文の前半部分は『障害と文学――「しのめ」から「青い芝の会」へ』（現代書館）、後半部分が同書となっている。気鋭の研究者にふさわしい卓越した文章、構成、また各章の詳細な注記は、著者のたえざる研鑽の証であろう。長年に亘ってハンセン病資料館に通い、実に緻密な考察を行った成果であるが、とりわけ筆者には第四章の「癩」の「隠喩」と「いのち」の「隠喩」――北條民雄「いのちの初夜」と同時代」が印象深く、今後の北條研究の必須文献である。ハンセン病文学の領域を超え、文学の本質を考究した白眉の文学論となっている。極限における生死の問題を文学論としてここまで掘り下げた感性と努力は稀有である。若い知性の眼でみた世界は、これから多くの新しい文学研究の誕生を予感させずにおかない。最近では若い世代からの新しい視点による再読も始まっている。中江有里『NHKテキスト100分de名著 北條民雄いのちの初夜』（NHK出版、2023）には、全四章（四回分放送）が収録されている。「生命を生ききる」という意味。「書くことで見出した絶望の先にある希望」。女性の視点からの瑞々しい筆致が印象的である。

はじめに／苦悩や絶望と共に、希望を感じさせる文学／第1回放送…せめぎ合う「生」と「死」／第2回放送…「いのち」を観察する眼
／第3回放送…再生への旅立ち／第4回放送…絶望の底にある希望

このほか、歴大な研究の蓄積はおそらくは世界に類を見ない、日本文学の豊饒なる世界の証でもあるのだが、それらの刻苦奮闘の営為は、華やかな文学、エンターテイメントの世界にあって、容易に目の目を見ることはない。消費物、娯楽的読物がどうしても一般に享受されざるを得

ない。他人は裏道よりはどうしても日の当たる道を歩きたいように。だが、文学の本質は、苦しみの中から生きるための文学の叡智とは何かを模索し、希求すること、弱者の地平、視線に立って世界を見ることではないだろうか。文学とは、己の世界観、生命観を考究する永遠の闘いなのだ。そこでは常に正統と異端の闘いが火花を散らす。

そして、日本には世界に誇るべきハンセン病文学というジャンルがあり、その全集も刊行されていることを明記しておこう。一九二六年から二〇〇〇年までの七四年にわたる、ハンセン病患者・元患者による作品の集大成である。日本の百年の文学史に対してもう一つの流れをつくる（第十巻鶴見俊輔解説）。以後の作品群については追補、続編が俟たれる。

『ハンセン病文学全集』全一〇巻 皓星社 二〇〇二

- 第一巻 加賀乙彦編 小説一／第二巻 加賀乙彦編 小説二／第三巻 加賀乙彦編 小説三／第四巻 鶴見俊輔編 記録・随筆／第五巻 大岡信、加賀乙彦他編 評論／第六巻 大岡信、加賀乙彦他編 詩一／第七巻 大岡信、加賀乙彦他編 詩二／第八巻 大岡信、大谷藤郎編 短歌／第九巻 大岡信、田口麦彦編 俳句、川柳／第十巻 鶴見俊輔編 児童作品

六.“生命（いのち）の文学”——川端康成と北條民雄

日本近現代文学史のなかで、川端康成と北條民雄の交流ほど、異彩を放っている例は無いように思われる。もちろん、文学を志す以上、直接間接に師と仰ぐ存在は不可避のように思われるが、師と仰がれる側の対処の仕方もまたさまざまである。

川端は北條民雄を看取って数年後、戦時下の鹿屋特攻基地に陸軍報道班員として赴き、沖繩作戦に特攻出撃する若鷺、荒鷺を見送っている。多胡吉郎『生命の罅 川端康成と〈特攻〉』（現代書館2002）にはその詳細な経緯が綴られているが、川端は見送る特攻隊の背中に夭逝した北條民雄の面影を重ねていなかっただろうか。若き生命の終焉。天賦の才能を持ちながら、死んでいかねばならぬ運命の数々。

最初に北條民雄が川端に書き送った最初の書簡の、次の一節ほど大きな感動をもたらされるものはない。書くことでのいのちの存在を知ること、その並々ならぬ決意である（句読点など原文のまま）。

突然こうしたものを差上誠に失礼と存じますが、僕は七條晃司と申すものです。先生の御作はずっと拝見しておりました。そして自分もそのようなものを書き度いと希い出来得る限りの努力を重ねてまいりました。また東京に住んでいました頃は非一度お訪ねしたいと思いでなかつたら、もうずっと以前に先生にお眼にかかれていられるのでしたけれど。

そして入所以来三ヶ月を経て、今の苦しみを切々と語り、文学を志す決意を述べるのだが、湧き立つ創作への意欲、衝動を抑えきれない心情があふれ出ている。「きつと返事を下さい」と繰り返す北條は、この書信に生のすべてを賭けたかのようなのである。

もう先生はとくに僕がこの文章を書き綴ってお送りしようとしている僕の気持ちをお察しになられたと思います。僕は先生に何かを求めているのです。今の僕はまるで弱くなっています。きつと僕は先生のお手紙を戴くだけという理由から文学に精を出すことが出来ると思っています。

僕は今百五十枚くらいの見当でこの病院の内部のことを書きはじめています。出来上がったら先生に見て戴きたいのですが見て戴けるでしょうか？

きつと返事を下さい。こうしたどん底にたたき込まれて、死に得なかった僕が、文学に一条の光りを見出し、今、起き上ろうとしているのです。

きつと御返事を下さい。先生の御返事を得ると云う丈のことで僕は起き上がることが出来そうに思われるのです。

天涯孤独であった川端が七條晃司という癩者の書簡に感動せずにいられないわけはなかった。当時のすでに高名な文豪に手紙を書くことという行為自体、北條には確たる自信、決意のようなものがあつたからだろう。

七・大江満雄編『詩集 いのちの芽』の復刊

新聞各紙にも紹介されたように、二〇二三年二月、大江満雄編『詩集 いのちの芽』が国立ハンセン病資料館から復刊された。初版は『日本ライ・ニューエイジ詩集「いのちの芽」』(三一書房、1963)で、詩人大江満雄(1906-1991)の呼びかけで刊行されたが、七十年振りにふたたび日の目をみた。七三名もの詩人の作品が収録されている。解説「『いのちの芽』復刊に寄せて」(木村哲也)は復刻の意義を説いている。「世界の癩に関する年譜」も新たに加わった。詩集には、鹿兒島鹿屋の同人誌『火山地帯』の創始者島比呂志らの作品が収められている。

戦時中は南方に派遣された重村一二の詩「宣告の手記」から一編をあげる。

——あなたはレプラです

といわれたその一瞬

硝酸をあげせられたように思った

私の二十五年の歴史の

全リズムが

果てしない奈落に

頭蓋骨を粉々にくだかれ

心の水銀が

無限のかなたに飛び散ったかのように思った。

あの激しい戦場で

すこしもひるまなかった私が

今 恐怖と絶望のどん底で

こんなに青ざめなければならぬ

……

レプラ (lepra) はラテン語でハンセン病。重村は一九二二年、山口県に生まれた。呉海軍工廠水雷部、鉄道などに勤め、一九四三年九月東京鉄道教習所専修部隧道科に入所、同年十一月応召、南方派遣される。一九四五年復員後にハンセン病を発症。一九四六年、熊本菊池恵楓園に入園。この「宣告」は、一瞬にして全人格を剥奪された衝撃を意味する。後段四行はとくに胸にせまる。

『いのちの芽』以後に発表された詩集に、桜井哲夫『詩集 タイの蝶々』（土曜美術社出版販売、2000）がある。詩集の最後に収められているのが「タイの蝶々」。癩病で視力を失くした詩人には「非願」のタイへの旅が実現できても、美しい蝶々が見えるはずもなかったが、彼ははっきりと脳裏に飛び交う真っ白な蝶々を見たのだった（書影は筆者所蔵による）。

……

シヤム湾に近いハンセン病コロニーを訪ね

タイ東北部の施設と四箇所のコロニーを訪ねた

タイ国の十一月の空には白い蝶々が舞っていた
コロニーを訪ねるたびに真っ先に迎えてくれた
のは鶏だった

……

子供たちが朝から作ったという花の首飾りを

首から掛けてくれた

名も知らぬ花の匂いに見えない俺の目が潤んだ

……

タイにもハンセン病施設が存在する。⁽³⁾ タイでは「ローク・ルアン (Loek Luang)」と称され、一大流行したラーマ9世、即ち前国王のプーミポン・アドゥンヤデート(1927-2016)の時代に病院・療養所が建てられた。また、バンコクには Rajpracha Samasai Institute (タイ語で สานึกธรรมสารใจธรรม) という施設がある。タイ語では熱帯病の一種のようでもあり、ほかの皮膚病疾患の患者と同じように収容されていると聞いたことがある。

また、最近では沢知恵『うたに刻まれたハンセン病因隔離の歴史…園歌は歌う』(岩波ブックレット1070、2022)が出されていることも附記しておきたい。

退館時に、係員から『ふれあい文芸』(令和五年版)が手渡された。各地のハンセン病患者が書きのこした創作集である。詩、俳句、短歌、川柳、随筆、それぞれの作品の中に生きようとする力と明日への希望が綴られている。「はじめに」には、次のように書かれている。

本誌は、強制隔離された療養所内で、入所者の方々が文芸創作に託してこられた思いを起源としています。厳しい状況下で命を見つめ自然と対話し、今年も多くの方々が応募してくださいました。またハンセン病問題に関心を寄せて下さる一般からの応募も、年を追うごとに増えています。

この「ふれあい文芸」をその名のとおり、ハンセン病回復者と一般の方々との心のふれあいの場としてご活用いただけたら、これ以上の喜びはありません。

随筆の「菊池電車」(準特選)が特に印象に残った。「あとがき」によれば、現在の全国一四カ所のハンセン病療養所に九二〇余名の入所者がいる。病が治癒されている現在にあっても、高齢化や後遺症障害、根強く残る差別意識などにより、社会復帰にはいまだ多くの課題が残されている。

八・おわりに 〈障害〉、〈隔離〉、〈差別〉と文学による〈告発〉と〈救済〉

今日ではハンセン病は過去の疾病となった。あの忌まわしき病魔はほとんど地上から消え去ったかに見える。だが、今後、複雑な生態系のかからいつ難病が発生するかは誰も予測がつかない。一般のコロナ禍という世界を巻きこんだパンデミックは、その序章のように思えなくもない。人間の危機意識はともすれば満たされた時代の中で等閑視されがちである。

国のハンセン病隔離政策に一貫して反対し、患者の治療に生涯を捧げた京都大学の小笠原登医師（1888～1970）のドキュメンタリー映画「一人になる」が二〇二一年に公開され、いまなお全国各地で自主上映されている。その中心になう「命と人権のライト」は「ハンセン病から学ぶ」という啓蒙活動が続けていることも附記しておきたい。

小笠原医師は一九一五年に京都帝国大学医学科を卒業後、京大病院の皮膚科特別研究室でハンセン病患者の治療にあたった。当時、ハンセン病は誤った認識から、国による患者の強制隔離が行われ、患者や家族らは苛烈な差別や偏見にさらされ続けた。「らい予防法」は一九九六年に廃止。二〇〇一年には、元患者による国家賠償請求訴訟で熊本地裁が隔離は違憲との判決を出し、国は控訴を断念。政府も謝罪した。小笠原医師は、そのはるか前から隔離政策に反対し続けた。患者を守るためにカルテの病名欄を空欄にして診療し、ある患者の家族が職場を追われそうになった時には、同僚や上司を説得するため、遠方まで足を運ぶこともあったという。

ハンセン病発病は鐘の音が鳴るのと同じである、という。鐘の音は撞木と鐘とがうまく一致しなければ鳴らない。撞木と鐘。どちらかに欠陥があれば、叩いても音は出ない。ここで撞木はらい菌で、鐘は体質にたとえられる。撞木であるらい菌にばかりとらわれることなく、音が出る鐘がどういうものか、つまりハンセン病発病をする体質がどういうものかを究めることの方が重要である、と小笠原は述べている。

見る、感じるという行為、感情は、見られる、書かれるという相手側の視点に立つてはじめて等価的な意味を獲得する。想像も表現も、体験を追尾する時点で、すでに後発の宿命をもつ。しかし、追われる者よりも追う者の側が心理的に有利なように、勝ち続ける人が必ずしも優位であり続けるわけではないように、書き手、読み手にも、対等に、いやそれ以上に、視野狭窄に抗うべく、広角度に語る資格、視野があってもよいのだから。

北條民雄の文学は、文学のになうべき自己告発と自己救済の本質を、時代を越えて現代にも照射し続けている。二〇二〇年から世界を襲ったコロナ禍というパンデミック、感染症爆発の現実においても、いわれなき差別が見られた。人間が共存する限り、異質な対象の隔離は回避できない。いな、今後も、さまざまな疾患が予見されかねない現実、グローバル化の陥穽でもあるといえよう。

注

- (1) 新約聖書マタイ伝冒頭第8章の1節から3節に言う(黒崎幸吉編、註解新約聖書マタイ伝)。
- (2) 朝日新聞(夕刊)二〇二三年四月三日掲載「いのちの芽」の詩人たち ほとばしる「生」「希望」
- (3) タイのハンセン病については、駐タイ国日本大使館のピヤトーン・ケウワッタナ氏によった。
- (4) 「命と人権のライト」の法人情報は次のホームページを参照。
<https://info.gbiz.go.jp/hojin/ichihan?hojinBango=8330005010532> (2023.12.31 検索)
- (5) 小笠原登医師と映画「一人になる」については次のホームページなどから要約した。
<https://jodo-shinshuinfo/2021/04/09/28355/> (2023.12.31 検索)

参考文献(一部。本文にあげたもの以外、発表順)

- 荒井裕樹『隔離の文学 ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス 2011
- 井上瞳「病いと揺らぎ——北條民雄「いのちの初夜」における名付けと名乗りに関する考察——」『未来共創』第9号 2022
- 大江満雄「ライ文学の新生面」『新日本文学』8-10 1953.10
- 大竹章『無菌地帯——らい予防法の真実とは——』草土文化社 1996
- 木村功『病の言語表象』和泉選書 2016
- 多胡吉郎『生命の樹 川端康成と〈特攻〉』現代書館 2022
- 辻吉祥「北條民雄『いのちの初夜』論——癩者となる癩者——」『昭和文学研究』61 昭和文学会編集委員会 2010
- 奈良崎英穂「〈癩〉という他者——北條民雄『問木老人』『いのちの初夜』論」『昭和文学研究』37 昭和文学会編集委員会 1998
- 光岡良二『いのちの火影 北條民雄覚え書き』沖積舎 1965